Real Game 第1章 ~玲依編~

猫桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Real Game 第1章 玲依編

【Nコード】

N56410

【作者名】

猫桜

【あらすじ】

Real Game本戦開幕！

9月7日

アラーム音がうるさい……

時間は23時丁度。

近くの電球をつけて見る。

外はやはりまだまだ暗いようだ。

寝ぼけ眼なままその日に着る予定で置いてある衣服を乱暴に手元へ
手繰り寄せる……同時に起床。

洗面台の栓を閉じ、そこへ給水タンクから適量の水を流し込む。

バシャバシャ……

と音を立てながら冷たい水を顔面に浴びる。

「お風呂入りたいなあ……」

ぼろろとしながら彼女はタオルで顔を拭きながら化粧ポーチから
愛用品達を取り出す。

約30分ほどで化粧が終わり、APを見ながらなにか考え事を始める。

(やっぱりこれ見たことあるんだよなあ…)

電池で動くタイプのアイロンでとりあえず髪を整えてみる。

鏡を見ながら深いため息を吐く。

(やっぱりお風呂入りたいよなあ…)

まあ…いいか…

煙草に火をつけて、ゆっくりと紫煙を吐き出す。

(そいえば煙草…久しぶりかも?)

彼女得意の一人ノリ突っ込みも今日はバツチリ。

味を確かめるように1本をゆっくりと吸い尽くす。

APに表示されている時間が23時35分になったのを確認。

ゆっくりと病室の扉へと向かい始めた。

彼女に当てられた部屋は405号室。

仲間が待っている部屋はその隣の406号室である。

すぐに隣室の扉の前へ辿り着き、軽くドアをノックする。

「おう！入れよう！」

中から元気がいい若い男の声がしたのを確認し、ゆっくりとドアを開ける……

「おう！玲依ちゃん起きたか？」

「意外と時間には真面目なんだな？」

中には若い男が1人、同じく見た目は男とさほど変わらないほど若く、遠めでみても美白美人とわかるモデル級の女が1人。

ベッドの上に腰をかけて2人とも煙草を吹かしていた。

「ちよつと煙いってここ！換気しよ！換気！」

玲依と呼ばれた彼女は窓ガラスを気持ち程度にあけ、自分も適当な

ベッドに腰を掛け煙草に火をつけた。

「治臣遅いなあ……」

「あいつはなにかと忙しいやつだからな？」

「井上さんと一緒に昨日も遅くまで話してたみたいだし……」

APの時間を見ながら3人は次々と灰皿を汚していく。

ガタガタッ……

406号室の扉が少し乱暴に開かれる。

「すまん！待たせたな……」

扉からこれまた色白でもやしのような体格のホストのような外見の若い男が1人。その後には白衣を着た黒ブチ眼鏡が似合う男性が1人。

「遅いぞ！」

「10分前だよ」

「ああ…わかってる……」

406号室内には男女合わせて5人の人間が集まっていた。

現在の時刻。

23時51分……

9月7日〜その2

APのアラーム音が鳴る。

この場にいる5人は同時に自分のAPのメッセージボックスを開く。

新着メッセージあり

件名：クエスト

本文：9月12日までにプレイヤーを1人殺せ。

注意 それまでに達成できなかった場合は『失格者』扱いとなる。

「予想通りの展開だな……」

「なんとなくそんな予感はしてた……」

「プレイヤーって事は……？」

「人間だな……ハンターではない」

「機械人形よりは対処が楽だと思いますが……」

5人はため息に近い言葉を放ち、各々が落胆している。

しかし、病院にて新たにパーティーに加わった「井上 章正」だけは1人だけ大したことがないように振舞っている。

「章正！人殺しをするんだぞ？」

「あたしは嫌だな……」

「私も玲依に同感だ……」

「ハンターよりも人間のほうがなにかと厄介だとは思っが……」

「しかし、機械相手ではないので、拳銃1発で簡単に……」

「そういう問題じゃねえんだよ！！！！」

純は章正は楽観的に考えていると判断したらしく、章正の胸倉を掴む。

「殺す殺さない以前に、俺らは人殺しに対して免疫がない！つまり……ハンターと戦っている時よりも行動が鈍くなる可能性があるんだ！そんな素人同然な俺らがスキルも使う人間を倒せるとでも思っつてんのかよ！」

いかにも純らしい…途中までは正論のように聞こえていた言葉であったが、やはり戦う事前提に聞こえてしまう。

「確かに…私らは他の人間がどんなスキルを持ってて、どんな武器を持っているかなんて知るわけがない…」

「逆に言えば相手もあだし達のスキルとかわからないんじゃない？」

「なるほど…状況はほとんど五分…」

「クエストのクリア条件がよくわからないのですが…おそらく1人で1カウントって事なんじゃないか？」

何事もなかったかのように章正は純の腕を振り払い、本題へと話しを戻す。

「これ…日本の人口半分になりますね…」

「全員がクエストを遂行すればの話だが…」

「『失格者』がよくわからないのだが…」

「おそらくゲーム側に殺されると考えていいかもしれないね…」

「くそっ…なんなんだこのクソゲームは…」

中々クエストを遂行するか否かの意見が一致せず、玲依たち5人は

途方に暮れていた。

「純…お前が決める。私はお前についていくと決めた」

「晴香さんがそう言うんなら…あたしも純君に任せるよ」

「同感だ…」

「元木君。よく状況を判断して決断してくださいね？」

結局、純を除いた4人は純に決断を丸投げ、純の言葉を待つ事に意見が一致する。

「わかった…じゃあ戦うしかないだろう…だが！俺らは仲間なんだ。1人でも死ぬような事があってみる？一気にモチベやらなんやらが下がる…それは避けなきゃいけないんだ」

「玲依のスキルさえあれば私らは死ぬ事はない」

「え？あたし期待されてるのか？」

「渡辺君のスキルが俺たちの明暗を握ってるようなもんだ」

「スロウ…でしたね？あれは人間相手ならかなり強力な武器になりますね…」

なんとなく他力本願の集まりのような集団だと玲依は解釈し始めるが…

「おい！リーダーを見てみる…」

純の放った唐突な声に、全員は一瞬緊張した後にAPからリーダーを確認する。

北西の方角に無数の緑の点が集まっている…

数はおそらく10〜20人前後。

明らかに玲依たちよりも倍以上の人数だと見てわかる。

「もしかしてこれって…」

「まさかな…？」

「いや…そのまさかかもしれん」

「下手に動かない方が良いと思われれます」

「ああ…明らかに向こう側も俺らの人数や方角は把握しているという事になるしな…」

最悪な展開を予想しつつ、玲依たちはしばらく病院内に留まる事にした。

9月7日

新着メッセージあり

件名：クエスト

本文：9月12日までにプレイヤーを1人殺せ。

注意 それまでに達成できなかった場合は『失格者』扱いとなる。

「やはり制裁の 때가きてしまったようだ…私たちは主の意向を受け入れこれに従わなくてはならない！」

歓声が沸き立ち、とある公民館の中ではライブハウスばりの音量が響いていた。

教壇の中央には白髪とも銀髪とも呼べる長髪の男性がマイクを握っている。

彼の特徴とも呼べるのは、銀髪の長髪なのだが、一番目につくのは彼の左目。縮瞳異常により、瞳孔が極端に小さく、ほぼ白目とも呼べる不気味な眼光を放っている。

しかし、視力は悪くなく、正常な右目よりも良好であるようで、人と1：1で話すときは右目を手で隠し、左目で見ながら喋る癖がる

のだ。

歳はかなり若くみえるのだが、なんとも言えぬ彼の雰囲気からは年齢を当てる事が不可能と思われるほどの威厳を醸し出している。

「我々、『曙光』はこれより戦う事に決定した！皆さん！これは主の意向なのです！決して屈せず躊躇してはなりません！」

総勢25名。

『曙光』という小規模なカルト集団の集まり、演説をしていた銀髪の男性はどつやら教祖であるようだ。

-----カルト集団：曙光

死は完全で美しく、その死を自らの意志のもと手に入れる自殺は人間のみには許された崇高な行いであるという教えを元に活動をしている。より多くの人を自死に導くことが自らの使命であり救済だと考えている。信者も60名以上の自殺者を出し、そのうちの4件に殺人罪が適用。教祖は自殺教唆罪とあわせ、死刑を求刑されるが、Real Gameでの異変により教祖は脱獄、そのままの流れで再教、活動を再開したのである。

犬養 恭夜 いぬかい きよつや

性別：男

年齢：23歳

職業：死刑囚 元教祖

身長：168cm

体重：52kg

力：C 頭脳：S

魅力：A 潜在力：B

ランキング：125815000中>75位

称号：受け入れた者

戦闘値：145

スキル：虜気楼

- - - - -

「皆さん！先日配布されたAPを見てください！南東の方角に緑の点が5個ほど映っています！これはやはり…主は我々の味方をして

「くれているとそう思えます！」

「犯罪ではありません！主は無秩序な者の排除を行おうとしているのです。我々はそのお手伝いをしなくてはならないのです！」

「皆さん！共に武器を取り戦いに行きましょう！！！！！」

再び沸く歓声。しかし、正気のようなものは感じられず、信者のほとんどもは虚ろな目をしている。

まるで洗脳されているかのように、犬養 恭夜の言葉を聞き入れている。

「皆さん！私の後に続いてください！私が先頭を切って出立致します！」

彼（犬養 恭夜、以後、恭夜）は冷たい輝きを放つ日本刀を手に持ち、信者24名を連れ、真っ直ぐ南東の方角へ行動を開始した。

9月7日〜その2〜

讓野咲 水遙 (じょうのさき すみれ)

性別：女

年齢：22歳

職業：OL

身長：160cm

体重：44キロ

力：C 頭脳：A

魅力：A 潜在力：A

ランキング：125815000中>69820位

称号：裏切り者

戦闘値：8

スキル：開花傾向あり

小鳥遊 和己 (たかなし わこ)

性別：女

年齢：19歳

職業：大学生

身長：145cm

体重：43kg

力：C 頭脳：A

魅力：B 潜在力：B

ランキング：125815000中>38542位

称号：多重人格者

戦闘値：40r97

スキル：傑出開花傾向あり

- - - - -

「いい？和己？教祖さんがもうちょっと離れたら一気に走るからね？」

「うっ……うん……ちょっと……怖いけど……」

カルト教団『曙光』は現在南東へ向かって行軍している。その中の2人の女性がひそひそと声を潜め、なにか作戦のようなものを企てていた。

強制とも拉致とも呼べる『曙光』の勧誘から逃れられず、今日までやむを得ず入団していた2人なのだ。

絶対になにか行動を起こすと彼女（讓野咲 水遥、以後、水遥）は読み。ずっと我慢しながら耐えていたのだった。

『曙光』の中で水遥は似たような境遇で入団した彼女（小鳥遊 和己、以後、和己）と出会い、2人でいつかこの集団から抜け出そうと企んでいたのだ。

「皆さん！相手とはどれくらい離れているのかわかりませんが！挫けずに頑張りましょう！」

恭夜は拡声器を手に持ち、信者24名へ向かって激励の言葉を発している。

そのことからまだまだ歩く事になるだろうと水遥は読む。

徐々に2人は足を緩め、集団の最後尾へと下がり始める。

他の信者はやはり正気ではないような顔付きでそんな2人など気に

も留めずひたすら前進を続けている。

水遥は生唾を飲み込み、教祖の隙を伺っている。和己はそんな水遥を心配そうな顔で見つめ、作戦がバレないようににも喋らず、徐々に歩くペースを落としている。

「……水遥ちゃん……いる……」

「え？どうしたの和己？」

「この世の者じゃない人がいる……」

「え??？」

突然の和己の言葉に水遥は戸惑いながらも、教祖からは目を逸らさないでいる。

和己の家系は先祖代々の住職。和己は性別上、巫女として幼い頃から教育されてきた。そして、和己は一族の中でも稀に見る才能の持ち主であり、靈感の高さは勿論のこと、徐霊術、降霊術といった儀式的なこととも出来るのである。

入団してからも1人でひっそりとその修行を行っていたため、精度などに狂いはなく日夜精進し続けているようだ。

和己は歩きながらある一箇所を見つめ、ぶつぶつとなにかを呟いている。

水遥は（しかし…すごいよなあ）と感心しながらも教祖の動きを注意深く観察していた。

「あの人…4日前にハンターに殺された人なんだって…」

「ハンターってあの…機械？だよな……」

「あの人教えてくれた…逃げるなら今のうちだって…」

「その人は信じられる人なのかな？」

「大丈夫…あの人はずっとの浮遊霊だから…それに…」

「それに？」

「悪霊が近づいてきてるみたい…だから早く逃げろ！って教えてくれた……」

「そう……」

水遥と和己はすぐに会話を切り上げ、じりじりと後退を始める。

教祖はそんな2人の行動など知る由もなく、拡声器でひたすら声を掛けている。

「走るよ！和己！」

「……うん！」

水遥と和己は脱兎の如く、列の最後尾から進路の逆方向へ走り出した！

9月7日〜その3〜

その場にいる5人のAPのアラームが同時に鳴る。

新着メッセージ2件

1件目

件名：戦闘開始

本文：総合個人ランキング7位へ挑戦者あり。

2件目

件名：戦闘開始

本文：総合個人ランキング8位へ挑戦者あり。

「なっ…これは…」

「明らかにどこかで人間同士の戦いが始まった…」

「人間同士だなんて…」

「悔しいが…仕方がない事なんだろうな…」

「ランキングってなんなんですかね？」

5人が同時にしゃべり、まるで会話にもならない。

そんなことよりもAPのレーダーに映っている無数の『赤い』点
気になっているからなのだ。

先ほどまでの緑の点と数は同じくらい、だが明らかに色の表示が赤
へ変わったことから、5人にとっては敵。明らかに向こう側は自分
らに対して殺意があるとわかる。

徐々に近づいてきている点から場所もそう遠くはないと感
じることが
できる。

つい先ほど、その点の集団から2個の緑色の点
が孤立し、どこかへ
移動する様子が確認できた事からこの集団はやはり人間である事
がわかった。

ハンターであるならば、目標から外れるなどということは皆無
であると、純と晴香が身をもって体験し、説得力があるからである。

メッセージを流し読みし、5人は再びレーダーの画面を開く。
もうすぐそこまできていると思われる。

「玲依ちゃん！スキルよろしくな！」

純の言葉で玲依は思い出したかのようにスキル「レーダー」を発動させる。

現在の玲依のレーダーで感知できる範囲はおよそ半径100メートルほどである。

「いないよ…この周辺には誰もいないよ…」

「そうか…だが、警戒しておくに越したことはない」

「しかし…ほんと便利ですね〜そのスキル…」

純は「いない」と応えた玲依に違和感を覚え始める。

APのレーダーの縮尺は大雑把すぎるのはわかるのだが、明らかにもう自分の点に重なるか重ならないかまで近づいていると思われる赤い点の集団。

100メートル以内で感知できないわけがない……

純は首をかしげながら再び目をAPのレーダーへ移す。

「敵はもうすぐ傍にいる…みんな！いつでも戦闘ができるように準備しておけよ！」

純の気合の入った声と同時に晴香、玲依、治臣、章正は緊張感を保つ。

「きたよ！」

玲依が全員に呼びかけをする。

その「きたよ！」という言葉から察するに玲依の感知できる範囲内に何者かが映ったと思われる事は言わずとも理解できる。

「人間だよ！武器は日本刀が1人。あとは…ナイフかな…小さい刃物が5〜6人」

玲依は冷静に相手の力量とも呼べる武器を全員に知らせる。

「あたしたちのいる場所も特定されたみたい…今病院の入り口前に集まってきたよ」

合図とも呼べる敵の位置。

もはや戦闘を避けることは不可能。

純は手に持っている煙草を強引に灰皿へ押し付ける。

「わかった…俺が先陣を切る！晴香いけるか？」

「変な気を使うなクソガキ！」

「じゃああたしとはるちゃんと章正さんはその後ろで援護にまわるよー！」

「了解」

「できる限り援護しますよ」

玲依たちは2班に分かれて外に居ると思われる敵の集団を迎撃することに決めた。

9月8日

APの時刻を確認する。

現在の時刻は02:35分。

まだまだ外は闇に包まれており、電源が通っていない院内は更に不気味な闇に包まれている。

非常口の看板さえも点等を拒否されているらしく、頼りになるのは自分の手に持つ懐中電灯のみ。

まるで肝試しや罰ゲームの類のようなそんなイメージを彷彿させる。

懐中電灯の灯りを頼りに純と晴香は院内の入り口へと直進している。

時折、外から吹く風が窓を揺らす程度の音。

他に聞こえる音と言えば自分らの足音のみである。

純は今から始まろうとしている初めての対人戦のことで頭がいつぱいで、既に頭の中では戦闘のイメージを描き始めている。

一方晴香は、病院の意外とも呼べる広さ、静寂さ、無音とも呼べない不気味な雰囲気恐怖を感じ始めていた。意外な事に晴香は暗所恐怖症であり、大のお化け嫌いだったりするのだ。

そんな晴香の事を知ってか知らずか純は普段どおりのペースで足を進める。

「純…ちよつと…進むの速…」

「あ？なんか言っただか？」

「いや…なんでもない…気にしないでくれ…」

素直に怖いと言えば純も話を解ってくれるはずなのだが、晴香の妙なプライドがそれを邪魔をするらしく、絶対に純にだけは弱みを見せたくないと主張しているように見える。

ポチャン……

遠くで水滴が落ちる音が2人の耳にはつきりと聞こえた。

「ひっ………」

晴香は予想外の音にたまらず頭を抑えてしゃがみ込む。

「なにやってんだお前……」

（ハッ……）

純の冷静な一言で晴香は我に帰る。

「ちよつと靴紐が……な？」

「まあ急いだって仕方ないからな？ ゆっくり行こうぜ」

「ゆっ……ゆっくり!？」

純の申し出に晴香は声が裏返る。

「じよっ冗談じゃない！ 院内に潜伏されればこちらが不利だぞ？ 下手すりゃ皆殺しにされるかもしれない！」

「そつ……そつか！ じゃあ俺らは早く迎撃しに行かないとだめなんだな！」

正論のような言い訳を放った晴香はなんとか心情を悟られずに済んだ……が、今の一言はまた予想外な行動への引き金になってしまった。

「いくぜ！晴香！しっかりついていよ！」

「へ？」

純は病院の入り口へ向かって怒涛の如きスピードで走り出した。

「おつ…お前！ばつ…バカあ！！！」

純の足の速さを知っている晴香は追い付けるかどうか…むしろ、見失わずに追えるかどうかの心配が頭をよぎる。

「嫌だつて！ちょっと…待って！」

突然1人になってしまった晴香の脳内はもはや焦り、恐怖、苛立ち。あらゆる不の感情で混乱気味になる。

ポチャン…ピチャン…

先ほど2人が聞いた水滴が晴香が走り去った廊下に響く。

蛇口がある部屋から聞こえるのならば話は別だが…

確実に廊下の何処かから聞こえる。

まるで純たちの後を追うかのように水滴は鳴り止む事をしない…

9月8日〜その2〜

玲依はスキル『レーダー』を発動させながら奇妙な違和感を覚える。感知できている範囲内には当然味方である、治臣、章正、晴香、純を捕らえているのだが……

明らかに純、晴香の近くに1人の見知らぬ影が映っている事に気付いた。

さきほど病院の入り口のあたりで見た日本刀を持つ男性。

かなり特徴的な白髪の高い髪。

不気味な雰囲気醸し出している。

純と晴香には戦闘面において絶大な信頼を寄せる玲依だが、この不気味な男性の雰囲気にはやや嫌な予感を感じざるを得ないようだ。

病院内の静けさ、暗黒とも呼べる漆黒の空間との調和が玲依の脳をも狂わし始めたのかもしれない。

「院内におそらくは敵が入ってきたかも……」

自信なく玲依は近くにいる章正と治臣につぶやく。

「ああ…それはAPのレーダーで確認済みだ」

「いよいよですね……」

2人もなんとも言えない緊張感に包まれながらも微弱ながらも余裕を見せている。

(案外平気なんだろうか……)

玲依は2人の表情を見ながら更に緊張し始める。

やはり、感知できている範囲内に映る1人の見知らぬ男性が気になるらしく、玲依はスキルに集中する。

怒涛の勢いで走っている純、それに続く晴香。

その後ろから厭らしいほどにゆっくりと、しかし、確実に2人へ近づいている男。

明らかにまだ2人は気付いていない。

なんらかのスキルで不意打ちを受けてしまえば…さすがのあの2人も危ない……

(なんとかしてあの2人に敵の接近を知らせなきゃ……)

額に汗を流しながら玲依は最悪な光景を想像する……。

そんな玲依を見ながら治臣は心情を察するように言葉を投げかける。

「渡辺君…あの2人ならきつと大丈夫だ！相手はハンターではないし…」

続けて章正も言葉を添える。

「ゲームマスターのような強力なスキルを持っている人間なんて早々いませんよ！きつと大丈夫ですよ！」

玲依は2人の励ましののような言葉を素直に受け取る事ができず、いてもたってもいられないような衝動に駆られていく……

突如！玲依は目の色を変え、現在待機している部屋から廊下へと走り出した。

尋常ではない事が起きたかのように、一瞬だけ見えた玲依の表情は強張っていた……

治臣と章正は予想外の玲依の行動に動揺していたが、既に院内に何名かの潜伏者がいることを考えれば後を追うべきだと目だけで会話を済ませ、すぐに玲依の後を追う。

「なっ！」

「身体が!！」

廊下に出た治臣と章正は身体の異変に気付く。

まるで鉛。いや…それ以上に身体が重く、動作を行うことができない。

足を動かそうと頭は働くが肝心な足や手が非常に遅い!

「これは……渡辺さんのスキルだ!」

「なるほど……これが『スロウ』ですか……」

すぐに治臣は玲依のスキルであると察する!

初めてスロウを体験した章正は「ほう……」と感心している。

「すぐ近くで戦闘が始まったのだろうか……」

「渡辺さん……無事ならいいですけどね……」

おそらくこのスキルがあれば玲依は無事である、むしろ相手が誰であろうと負ける事はないと確信を持っている治臣と章正は一先ずは安堵のため息を吐く。

「そういえば…渡辺さん…なにか武器のようなもの持ってましたっけ？」

「確かまだ拳銃の弾薬が残っているとは思っが……」

ガウンっ！！

予想通り廊下の奥から銃声が聞こえる。

玲依が放った銃撃なのかは知る術がないのだが、おそらくは……

人殺しに抵抗があつた玲依の心情を察する治臣は……

やはりもどかしいようななんとも言えない感情に包まれていく。

「章正……」

「どうしました？」

「俺そろそろ……」

「はい！わかりました……」

意味深な言葉を残しながら治臣はその場から姿を消した。

9月8日〜その3〜

突如院内に響いた銃声に純は足を止める。

明らかに階上から聞こえ、その場所には玲依、治臣、章正の3人が待機しているはず……

銃声ということは明らかに、外部の者が侵入し戦闘が始まったという事である。

(今…銃を持っているのは玲依ちゃんだったよな…)

(いや…さてよ…玲依ちゃんはスキルあるし…俺が言ってもスロウで足手まといに…)

純は玲依の援護にどうかと葛藤するが…

(玲依ちゃんよりも心配なのは晴香だしな…なにも迷うことはない…このままいこう…)

(ん?)

今まで走っていた純だったか不自然とも思える静寂に違和感を覚える。

(銃をもっているのは玲依ちゃんだけじゃない…!)

「晴香？」

純は慌てて真後ろを振り返る……

いない……

すぐ後ろを走っていたはずの晴香が忽然と姿を消している。

純は背筋になにか冷たいものが走るような感覚に襲われ、踵を返し身体を真後ろに向け走りだす！

(何やってるんだクソ女!!)

純は廊下のある場所までたどり着いた時、突然足が動かなくなる感覚が襲う！

「なっ…!!」

明らかにこれは以前も経験したスキルであると身体が覚えている。

玲依のスキル『スロウ』であると確信を持つ純。

「くそっ！身体が動かねえ！」

（一体なにが起きてるんだ！玲依ちゃん…なんでスロウを使ったんだよ……）

純は頭をフル回転させ、現在起きている状況を推理し始める……

（そうか…！晴香も玲依ちゃんのスロウで途中で俺と似たような事になってるのか！）

「くそっ！こりゃ間抜けだぞ…俺…」

「仲間のスキルすら応用できてないとは……これは案外楽なクエストでしたね……」

「誰だ…！」

純は不意に後ろから聞こえる声に反応する！

身体は遅く、真後ろを振り向くことができない！

「別に名乗る必要はないでしょう？貴方はここで死ぬのですから……」

その言葉と同時に純の背中に灼熱！

まるで鋭利な刃物で切られたかのような激痛が襲う！！

純のスキルである『絶対回避』はすでに発動しているのだが……

玲依のスキル『スロウ』により純の身体は回避行動ができずまともに得体の知れない攻撃を受けてしまう！！

「いつてえ……！てめえ！卑怯だぞ！！」

純は痛みを耐えながら必死に声を荒げる！！

「卑怯……？それは貴方のお仲間さんのそのスキルでしょう……」

純の背中に更に激痛が重なる……！！

「てめえ……！！！！」

「ははは……人間らしくていいですね。そついう人って実に……殺しがいがありますよ！」

純の脹脛のあたりにまた刃物による激痛が走る！！

首を下に向けることもおそらくは無理かと思われる……

自分がどれくらいの失血をしてるのかわからない……

「そんな斬り方じゃ……俺は死なねえぞ……？」

「ははは……まだそんな強がりと言える口があるのですね……僕はそんなに優しくくないですからね？甚振りながら殺すタイプなんですよー！」

腰、背中、脹脛、裏筋、肩……

純の背面のあらゆる場所に激痛が走る……

すでに意識を失ってもおかしくはない出血の量である。

純の足元には血でできた水溜りが出来ている……

「どうしました？もう限界ですか？」

「うぜえ……よ……」

「いいですね〜！そういう強がりな部分は好きですよ！元木君！」

更に両腕、両膝裏に激痛！！

（なにっ？俺の名前を知っている？）

純は突然自分の名を呼ばれた事で意識が戻り始める。

(ん……？言われてみればこいつの声……どこかで聞いた事がある……)

「ははは……元木君って意外と鈍感なんですね……ほら！ついさっきまで一緒におしゃべりしてたじゃないですか……！」

純の背中から脇腹にかけてなにかが貫通したような痛みが走る！

「てめえ……！ま……まさか……！」

「そのまさかかもしれませんね？」

更に反対側の脇腹になにかが突き刺さる！

「あ……き……」

「正解です！おめでとう！」

最後にどこを斬られたのか純は感じる事なく……

その場に崩れ落ちた……

9月8日〜その4〜

「さあ皆さん！この病院内に5名！我らの栄光のための生贄が隠れています！」

「もうなにも迷うことはありません！！行きましょう！！！」

恭夜は声を荒げ、信者たちに向かって激を飛ばす。

逃げた2人の事など知る由もない恭夜は自ら先頭に立ち、勢いよく病院の扉を開放する。

その瞬間！

「うぎゃあああああああ！」

「ひゃあああああああ！」

信者たちの最後尾からすさまじい悲鳴が聞こえる！

「何事っ!?!」

恭夜はすぐに身体の向きを変え、状況を確認しようとして目を凝らす。

目の前で信者たちが次々に倒れていく……

明らかに何者かに襲われていると考えずともわかる。

「なんと……伏兵がいたのですか!」

恭夜はすぐに自分のスキルを発動させる!

- - - - -

スキル発動

蜃気楼

- - - - -
スキル説明:

傑出スキル：塵気楼

ターゲットの視覚を狂わし、発動者の姿を錯乱させる。

ターゲットの目測よりも、発動者はより遠くにいるかのように錯覚することになる。

スキルの熟練度により応用が可能。

逆に近くに見せることも可能になる。

- - - - -

恭夜は日本刀を抜き、すぐに戦闘姿勢を作る。

……が！

生存していると思われる信者たちの数が極端に減っていくばかりで、相手はどこから攻撃しているのかわからない！

恭夜は既にハンターとの戦闘も経験済みであり、戦闘においての感度は悪くないのだが……

それとは無関係に相手がどこにいるのかすらわからない！

「馬鹿な……」

ほぼ落胆にも近い、ため息のような言葉が口から漏れる。

すでに死体と化した信者を見れば、まるで心臓だけが抉り取られたかのように胸にポツカリと穴が開いている。

おそらくは苦しむことなく、即死……

信者の死に際の顔を見れば驚愕したままの表情で目からは光がなくなっている事からそれがわかる。

「皆さん！落ち着いてください！よく観察するのです！相手はそう遠くにはいません！」

まるで気休めのように恭夜は信者に言葉を投げかけるが……

すでに10人近くの死亡者がおり、一行はパニック同然になっている。

「苦しむ事はない……わらわのためにその命を捧げれば良い……」

冷徹……その一言ですべて納得できるような冷たく、落ち着きを払

った声が響いた……

「何者だ！我らを曙光と知つての狼藉か！」

声の主はやはり恭夜の視界には入らない。

「光栄に思え……わらわのために命を捧げる事に……」

恭夜の目の前で更に3名の遺体が増える……

やはり、胸にはポツカリと穴が開いており、その穴からの血の量が凄まじい。

「貴様あ……！！！」

恭夜は目を見開き怒りを露にさせる！

「煩い……黙りなさい！」

.....

スキル発動

B a c k s p a c e

-
-
-
-
-
-
-

恭夜の心臓にあたる部分がゆっくりと沈み始める……

「ガハッ……」

いまだかつて味わった事のない苦しみに恭夜はつめき声をあげる。

胸に何かが押し当てられてるかのような苦しみ。

激痛ともまた違う奇妙な苦しみに恭夜はひたすら耐えるが……

薄れゆく意識の中で恭夜は自分の死に確信を持つ。

「はあ……はあ……曙光の指導者である私が……他人に殺されるなど……あつてはならないのだ！」

恭夜は最後の力を振り絞り、日本刀を自分の首へ突き刺した！

口からはおびただしいほどのどす黒い血が噴出し、そのまま恭夜は絶命した……

30名近くいたカルト集団……曙光は、たった1人の得体の知れない人物により、歴史上からも姿を消した……

病院内から死体の山と化している出入り口に、コツコツ……と足音が響く。

白衣を着た若めの医者がボソッとつぶやく…

「神楽さん？僕はクエスト完了してきましたよ？」

「そうか……ご苦労様……では至急、我らの元へ帰還せよ……」

「わかりました……神楽さんも随分と暴れましたね」

「相変わらず煩い男だな……」

「ははは…参ったなあ…神楽さんも相変わらずお堅いですね」

「それ以上の軽口は……命を落とす事になるぞ？……章正？」

「ははは…怖い怖い…ではこれより帰還しますね」

ゆっくりと……章正と呼ばれた男は病院を後にし、やや早足で死体の山を避けながら歩き出した……

9月9日

場所は千葉県、木更津市。

とある病院の中、一室にて……………

入院患者用のベッドには全身包帯で巻き、弱々しい息遣いでかろうじて生きているとわかる男性が1人。

その隣のベッドにも同様に、瀕死の状態である隻腕の女性が1人。

窓際のベッドには今にも泣き出しそうな顔をしながら左手には火のついた煙草を持っている女性が1人。

天候は雨。

APに表示された時間は現在13:09分。

日中であるはずなのだが、空は薄暗い。

まだ残暑が残る季節ならではの蒸し暑さが苦痛とも呼べる不快感を演出している。

玲依は瀕死の状態の2人を見ながら深いため息を吐く。

手馴れた手付きで煙草を灰皿に押し付け、拳銃へ弾薬を詰めていく

……

装鎮が完了したらしく、拳銃を腰につけているホルダーへしまっ。

「じゃ……行って来るね？」

返事に期待するわけでもなく、玲依は眠っている2人に言葉を投げる。

「私に任せて！絶対に……戻るから！」

玲依は静かに部屋の扉を開け、廊下へと歩き出した……。

「私はGMと申します」

「GMって……」

「おめでとうございます。貴女様方はパーティーイベントの参加権
利を獲得なされました」

「え？」

「単なるイベントでございますよ？難しい内容ではありません」

「え？」

「パーティーイベントの報酬は今回のクエストの免除……でございます
ますが…受けられますか？」

「クエスト……の免除!？」

「見れば、貴女様方のパーティーメンバーで、動けるのは貴女しか
おられませんね？この二名様はいつ目覚めるのやら……クエストに
は期限があるのを覚えておられますでしょうか？」

「あ……そういえば……」

「さあ…簡単なことですよ？貴女様がこのイベントをクリアすれば…とりあえずは生き残れます…何も難しく考える必要はありませんよ？」

「そっか…みんな助かるんだ…」

「さあ…どうしますか？受けますか？受けませんか？」

「やつ……やります！やらせて下さい！」

「ありがとうございます！ではイベントは明日、9月9日。14時からスタート致します。開始場所は……追って連絡いたしますので、APのメッセージをいつでも見れる状態でもよろしくお願いします」

「わかりました…」

「では…御機嫌よう…」

.....

昨日、病院内で重症の2人を見つけて慌てて部屋へ運んで応急処置を試してみた。

一体、昨日…なにがあったんだろう……

純くんと晴香さんが重症を負う相手なんて……

まだ院内にその張本人がいるかもしれない…。あたしは怖くてそんなの確認できない……。

はるちゃんと章正さんはどこかへ行ってしまったし……

APのリーダーにもあたしのリーダーにも映らないってことはもう

……

まさか…そんな事はないって！

だめだなあ……気が弱くなってた……

その後すぐにスーツ姿のちょっと年上って感じの男性が現れたんだ……

GM……

イベント……

どこかで聞いた事のあるような単語。それに今考えればあの男性もどこかで見たことあるような...

しかも最近.....

誰かに似てる気がする.....

ま...そんなことはどうでもいいよ...

イベントの場所は病院から少し離れた場所でやるらしい。

内容までは教えてくれなかったけど...

あたしがクリアすればみんな助かる！

それだけであたしがやらなきゃいけない！

断る理由なんてどこにもなかったんだ.....

玲依はゆっくりと病院の玄関の扉を開け、思わず息を呑んだ。

視界の先に広がる光景。

まさに地獄絵図と化した光景であった……

30人近くの人間の死体が散乱としている。

死後からまだそんなに時間は経過していないようだが、湿気や不愉快な温度により腐敗の進行が早い。

強烈な死臭。

思わず嘔吐しかける玲依であるが……

なんとか堪え、なるべく視界に入らないように駆け足で目的の場所へと向かっていった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5641o/>

Real Game 第1章 ~玲依編~

2011年9月29日12時11分発行